千葉県八千代市

平沢遺跡（ひらさわいせき）a 地点・殿台遺跡（とのだいいせき）a 地点

―都市計画道路 3・4・9 号線建設地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成 24 年度

八 千 代 市 教 育 委 員 会

凡　　例

1. 本書は，八千代市教育委員会が平成6・7年度公共事業埋蔵文化財調査事業として実施した発掘調査の報告書である。
2. 本事業は，都市計画道路3・4・9号線の建設に先立ち，八千代市教育委員会が実施した。
3. 本書に掲載した遺跡は，上高野字平沢158番地他所在の平沢遺跡a地点及び上高野字殿台149番2他所在の殿台遺跡a地点である。
4. 調査及び整理は以下のように実施した。

平沢遺跡確認調査	調査期間	平成7年1月25日～平成7年2月10日
	調査面積	上層456㎡/4,500㎡
平沢遺跡本調査	調査期間	平成7年4月10日～平成7年6月30日
	調査面積	1,250㎡
殿台遺跡第1次確認・本調査	調査期間	平成6年8月17日～平成6年10月6日
	調査面積	上層370㎡/3,616㎡（確認調査），18㎡（本調査） 下層16㎡/3,616㎡（確認調査），50㎡（本調査）
殿台遺跡第2次確認調査	調査期間	平成6年12月21日～平成6年12月27日
	調査面積	上層160㎡/1,200㎡
本整理	期間	平成21年9月1日～平成22年3月30日

5. 平沢遺跡の確認調査及び本調査は宮澤久史，殿台遺跡の確認調査及び本調査は森　竜哉が担当した。本整理については中野修秀が担当した。
6. 本書の図版作成は，見神光恵・日向洋子・山下千代子が行い，中野が統括した。
   編集・執筆は第1章第1節を森が，それ以外は中野が担当した。
7. 報告書の印刷・刊行は，平成24年度に実施した。
8. 出土した遺物・写真・図面等の調査資料は，八千代市教育委員会が保管している。
9. 挿図の第1図の地形図は，八千代市発行の25,000分の1八千代都市計画基本図を使用した。
10. 挿図の第2図の地形図は，八千代市発行の2,500分の1八千代都市計画基本図を使用した。
11. 本書掲載の公共座標値は，旧測地系によるものである。
12. 遺構№は，調査時の数字で表記した。遺構の内容や時期が異なる場合も，調査時点の№を使用している。
13. 各実測図の縮尺については，原則として下記のとおりである。これ以外は，適宜挿図中に示した。
    竪穴住居跡1/80　　炉跡及びピット1/40　　溝跡1/200
14. 遺構実測図中のスクリーントーンは，以下のとおりである。
    ■ 焼土範囲　　■ 炉跡
15. 遺物実測図中のスクリーントーンは，以下のとおりである。
    □ 赤色塗彩　　■ 赤彩の痕跡　　■ スス・コゲなどの付着範囲
16. 本書は，平成21年度事業として本整理及び報告書の原稿執筆までを行い，平成24年度事業として報告書刊行を行った。本文の内容・挿図・写真図版については，基本的に平成21年度作成時段階のものである。
17. 発掘調査から整理作業の間において，千葉県教育庁文化財課にご指導・ご協力をいただきました。記して感謝いたします。

本　文　目　次

凡　例
目　次
第１章　調査経過及び概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の方法と経過 …… 1
　　1.　平沢遺跡ａ地点の本調査 …… 1
　　2.　殿台遺跡ａ地点の第１次確認・本調査 …… 1
　第３節　遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境 …… 1
第２章　平沢遺跡ａ地点の調査 …… 6
　第１節　調査の概要 …… 6
　第２節　縄文時代 …… 6
　　1.　縄文土器 …… 6
　　2.　石器 …… 6
　第３節　弥生時代 …… 8
　　1.　竪穴住居跡 …… 8
　第４節　土坑及び溝跡 …… 33
　　1.　土坑 …… 33
　　2.　溝跡 …… 33
第３章　殿台遺跡ａ地点の調査 …… 41
　第１節　調査の概要 …… 41
　第２節　旧石器時代 …… 41
　　1.　遺物集中箇所 …… 41
　第３節　縄文時代 …… 41
　　1.　縄文土器 …… 41
　第４節　奈良時代～江戸時代 …… 44
　　1.　調査区出土遺物 …… 44
　　2.　土坑 …… 44
第４章　成果と課題 …… 46
　第１節　平沢遺跡ａ地点 …… 46
　　1.　縄文時代の様相 …… 46
　　2.　弥生時代の様相 …… 46
　第２節　殿台遺跡ａ地点 …… 50
　　1.　旧石器時代及び縄文時代の様相 …… 50
　　2.　井戸状遺構 …… 50
参考文献 …… 50
図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第 1図　村上台における弥生時代
後期遺跡の分布 …… 2
第 2図　遺跡範囲・調査範囲
及び周辺の地形 …… 4
第 3図　平沢遺跡遺構配置図 …… 5
第 4図　縄文時代出土遺物 …… 7
第 5図　01D実測図 …… 9
第 6図　01D炭化物・焼土・遺物分析図 …… 10
第 7図　01D出土遺物 …… 11
第 8図　02D実測図 …… 13
第 9図　02D出土遺物 …… 14
第10図　03D実測図 …… 16
第11図　03D出土遺物 …… 17
第12図　04D実測図 …… 19
第13図　04BD遺物分布図 …… 20
第14図　04D出土遺物 …… 21
第15図　05D実測図 …… 23
第16図　05D出土遺物 …… 24
第17図　06D実測図 …… 26
第18図　06D出土遺物 …… 27
第19図　07D実測図 …… 29
第20図　07D出土遺物 …… 30
第21図　08D実測図 …… 31
第22図　09D実測図 …… 32
第23図　01P・01M実測図 …… 34
第24図　殿台遺跡遺構配置図・
出土縄文土器 …… 42
第25図　旧石器時代の遺構・遺物 …… 43
第26図　01SX・02SX実測図
及び調査区出土遺物 … 45

表　目　次

弥生土器観察表 (1) 01D・02D …… 35
弥生土器観察表 (2) 03D …… 36
弥生土器観察表 (3) 04D …… 37
弥生土器観察表 (4) 05D・06D …… 38
弥生土器遺物観察表 (5) 07D …… 39
弥生土器遺物観察表 (6)
08D・09D・01M …… 40

写真図版目次

図版 1・2　平沢遺跡 a 地点 遺構
図版 3 ～ 10　平沢遺跡 a 地点 遺物
図版 11　殿台遺跡 a 地点 遺構
図版 12　殿台遺跡 a 地点 遺物

第１章　調査経過及び概要

第１節　調査にいたる経緯

平成５年９月，八千代市上高野字殿台 406-1 外の土地について，八千代市長から道路新設工事に伴い，「文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が八千代市教育委員会（以下「市教委」という。）教育長宛て提出された。照会地は，八千代市遺跡№ 217 平沢遺跡・№ 218 殿台遺跡の範囲内であり，過去において照会地を含む山林の試掘において，遺構を多数確認していたので，その旨，千葉県教育委員会（以下「県教委」という。）教育長宛て副申した。さらに県教委文化課と市教委との現地踏査の結果，畑地において土器片の散布を確認し，北側の削られた部分を除く範囲について，遺跡が所在する可能性が高いと判断された。平成６年１月，県教委教育長から開発面積 12,858.56㎡の内，10,000㎡について「遺跡が所在します」との回答があり，市教委はその旨八千代市長宛て伝達した。

その後，市教委と関係部局との協議の結果，当初の計画どおり道路建設を進めることになり，平成６年６月に八千代市長から土木工事の通知が提出された。市教委は，諸準備が整った同年８月に殿台遺跡第１次確認本調査，12 月に同遺跡第２次確認調査，平成７年１月に平沢遺跡確認調査を順次実施した。

確認調査の結果，殿台遺跡については調査完了とし，平沢遺跡については，調査対象面積 4,500㎡の内 1,250㎡について，引き続き保存のための協議が必要である，とした。関係部局による事業計画の変更がなく，市教委は平成７年４月に記録保存のための本調査を開始した。

第２節　調査の方法と経過

1. 平沢遺跡 a 地点の本調査

調査期間は，平成７年４月 10 日～平成７年６月 30 日である。

表土除去は，遺構確認面をソフトローム上面として重機を用いた。表土除去後，人力による清掃・遺構確認作業を行い，引き続き各遺構の掘り下げを行った。遺構の平面図・土層断面図・エレベーション図・遺物の取り上げは，造り方測量によって行った。

検出遺構などの写真撮影には，モノクロフィルム･リバーサルフィルムともブローニー判を中心とし，補助的に 35mm 判を使用した。

調査経過は，平成７年４月 10 日から調査区設定等を行い，14 日からバックホウによる表土除去を開始し，20 日に終了した。20 日から清掃・遺構確認作業に着手し，遺構を確認後，ただちに遺構調査を開始した。順次諸作業を行い，平成７年６月 30 日に現地調査を終了した。

2. 殿台遺跡 a 地点の第１次確認・本調査

調査期間は，平成６年８月 17 日～平成６年 10 月６日である。

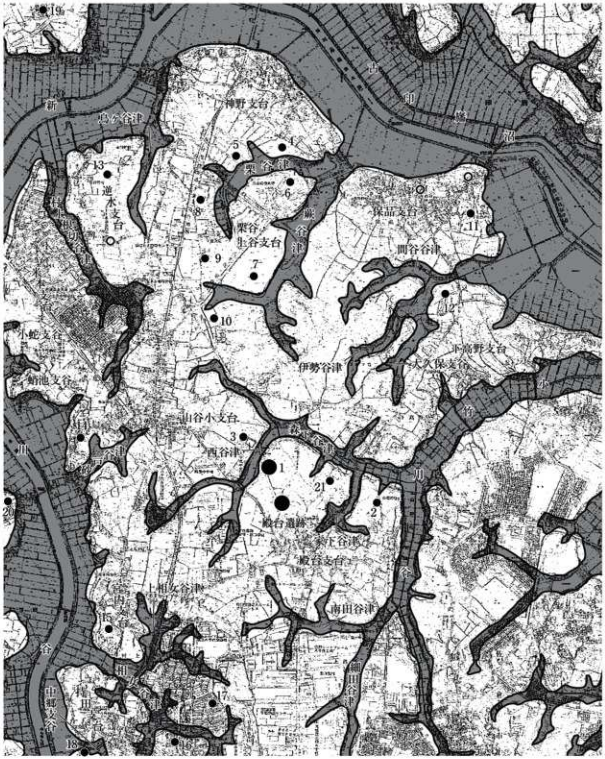
確認調査時に，遺構・遺物が検出されたトレンチを重機によって拡張した。

表土除去後，人力による清掃・遺構確認作業を行い，引き続き各遺構の掘り下げ及び下層調査を行った。遺構の平面図・土層断面図・エレベーション図・遺物の取り上げは，造り方測量によって行った。

検出遺構などの写真撮影は，モノクロフィルム・リバーサルフィルムとも 35mm 判を使用した。

第３節　遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

平沢遺跡及び殿台遺跡は，標高約 22m ～ 26m，現水田面との比高差が約 20m（新川側）の村上台に位置する。



第１図　村上台における弥生時代後期遺跡の分布（1：25,000）

1	平沢遺跡	8	役山東遺跡	15	村上宮内遺跡
2	上高野白幡遺跡	9	雷遺跡	16	村上込の内遺跡
3	阿蘇中学校東側遺跡	10	雷南遺跡	17	名主山遺跡
4	境堀遺跡	11	おおびた遺跡	18	浅間内遺跡
5	向境遺跡	12	南谷遺跡	19	道地遺跡
6	栗谷遺跡	13	逆水遺跡	20	菅地ノ台遺跡
7	上谷遺跡	14	米本城跡	21	堂の上遺跡

村上台は，西端が新川まで，東端は小竹川，南端は村上沖塚地区の低地から黒沢地区までで，勝田台と分かれる。西の新川側よりも東の印旛沼と小竹川側の方が開析谷が発達し，その結果として幾つもの小舌状台地群が形成された。また，小竹川から印旛沼に面した一帯には，「千葉段丘」が形成され，新川に面した「下総下位面」・「下総上位面」の台地端が比較的急崖になるのと好対照をなす。

村上台のほぼ中央から，小竹川に向かって東北東の方向で，比較的長大な開析谷が刻み込まれているのがわかる。この谷を地元での呼び名に倣い，森下谷津と呼ぶ。この谷を挟んだ南側が平沢・殿台地区で，その南端を画す開析谷が南田谷津である。

この平沢・殿台地区内に両遺跡は遺されており，東に㉑堂の上遺跡が隣接している。現水田面との比高差は，約９～10mである。

第１図は，村上台における弥生時代後期を中心とした遺跡分布である。以下，各地区ごとに見て行きたい。

平沢・殿台地区の北東端の小竹川と森下谷津に面した台地先端部には，②上高野白幡遺跡が所在する。そして，平沢遺跡と西谷津を挟み，その西側に対峙する台地縁辺部に③阿蘇中学校東側遺跡が所在している。

北へ目を転じると，村上台の最北端が神野地区で，④境堀遺跡・⑤向境遺跡が所在する。さらに栗谷津を挟んだ南側台地上に，⑥栗谷遺跡・⑦上谷遺跡が所在している。その西側台地基部には，⑧役山東遺跡・⑨雷遺跡・⑩雷南遺跡が並んで所在し，「弥生ベルト」の観がある。

栗谷・上谷地区からさらに，蕨谷津を挟んだ東側に広がるのが保品地区で，印旛沼に面した突端部分の「千葉段丘」上を中心として，⑪おおびた遺跡が展開する。

保品地区から，間谷谷津を挟んだ東側一帯が下高野地区で，北東端となる。ここの「千葉段丘」上には⑫南谷遺跡が所在しており，「下総下位面」で佐倉市先崎西原遺跡が隣接する。

北端の神野地区から逆時計回りに，鳥ヶ谷津を挟んだ西側が逆水地区で，⑬逆水遺跡が所在する。

ここから，村上根切谷津を挟んで西側に隣接するのが米本地区で，その南側基部に⑭米本城跡が所在する。

米本地区から，新川に沿って南下し，村上地区の基部付近を見て行くと，相女谷津の開析により，樹枝上に入り込んだ宮内谷津・向原谷津が形成され，その北側部分の宮内地区には，⑮村上宮内遺跡が所在し，込ノ内地区には⑯村上込の内遺跡が，さらに北側に隣接して⑰名主山遺跡が所在している。

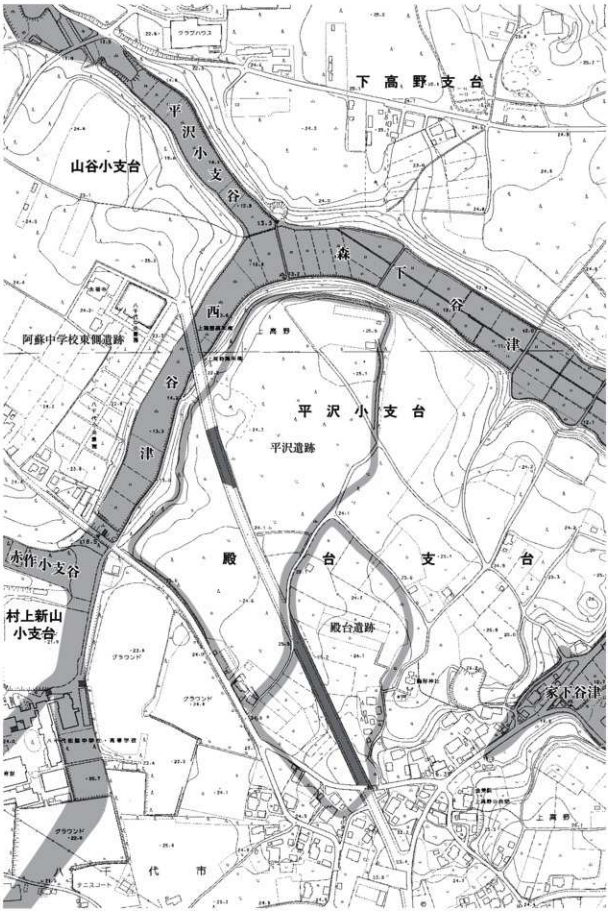
宮内地区から相女谷津を挟んだ南側に広がるのが持田地区で，ここが村上台の南西端である。

持田地区には，⑱浅間内遺跡が所在し，報告書が刊行されている（常松 2007・常松他 2007）。

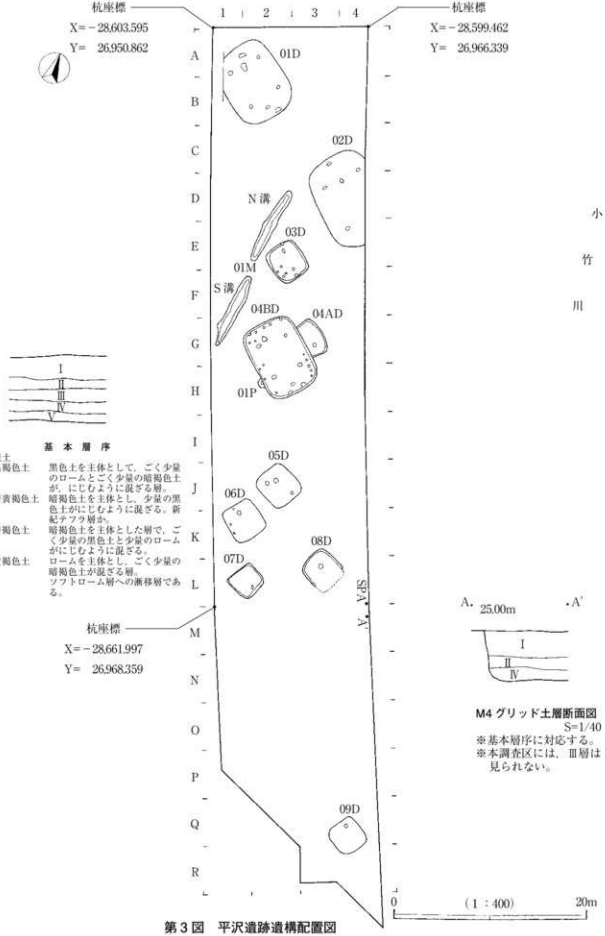
その他では，島田台から⑲道地遺跡，大和田新田台からは⑳菅地ノ台遺跡を掲載した。

参考文献

八千代市文化財総合調査団　1981 『八千代市文化財総合調査報告Ⅰ』 八千代市教育委員会
八千代市教育委員会　1983 『八千代の遺跡　－千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告－』
常松成人　2007 『千葉県八千代市　浅間内遺跡発掘調査報告書　平成 18 年度』 八千代市教育委員会
常松成人他　2007 『千葉県八千代市　浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡』 八千代市遺跡調査会



第２図　遺跡範囲・調査範囲及び周辺の地形（1：5,000）



第３図　平沢遺跡遺構配置図

第２章　平沢遺跡ａ地点の調査

第１節　調査の概要

都市計画道路３・４・９号線は，平沢・殿台地区を北西－南東の方向に縦断する形で設定されている。そのため，本遺跡の西側部分を道路が分断することになる。

確認調査の結果に基づき，竪穴住居跡などが検出されたエリアを中心に本調査区域が設定された。

なお，確認調査の概要については，下記の文献を参照されたい[1]。

調査は道路幅という，極めて限定されたものであったが，弥生時代の竪穴住居跡10軒，時期不明の土坑１基，溝跡１条というように，比較的高密度で遺構が検出された。

出土遺物は，縄文土器・石器（石鏃）・弥生土器・石器（石鏃・砥石）・古墳時代土師器である。以下の項では，検出された遺構・遺物を，時代順に記述して行きたい。

1）宮澤久史　1996『7. 平沢遺跡　確認調査』『八千代市埋蔵文化財調査年報　－　平成６年度版　－』八千代市教育委員会　16-19頁

第２節　縄文時代

縄文時代の遺構は，確認調査・本調査とも，検出されていない。しかし，後世の遺構覆土中から縄文土器が少量出土しており，遺跡における土地利用史を語る上でも，看過すべきではないと判断し，殿台遺跡ともども掲載することにした。これが，平沢・殿台地区での報告例としては最初となる。

そのため，本節では本調査での遺構外及び遺構覆土中から抽出した遺物に加え，確認調査時の出土遺物も併せて報告する。

1. 縄文土器（第４図）

出土総数は54点（確認調査７点，本調査47点）で，これが抽出できた全てである。

1・2 は田戸下層式土器で，同一個体。ともに，横位の細沈線をやや平行気味に引いた胴部片。

3・4 は条痕文系土器。表面はフネガイ属の貝殻による，斜位方向の疎らな条痕を施す。裏面はナデ。

5～**7** は黒浜式土器。**5** は小波状縁か。半截ないし多截竹管の内側を用いて，押し引きながら意匠を描くもの。**6・7** は同一個体。附加条縄文の転がす方向を変えて，菱形構成となるものである。

8 は前期末葉の縄文系粗製土器。地文縄文の１段Ｌ（あるいは反撚か）を，密接施文する。

9 は阿玉台式土器。隆起線で区画文を描き，隆起線脇に単列の「爪形文」を沿わせる。阿玉台Ⅲ式。

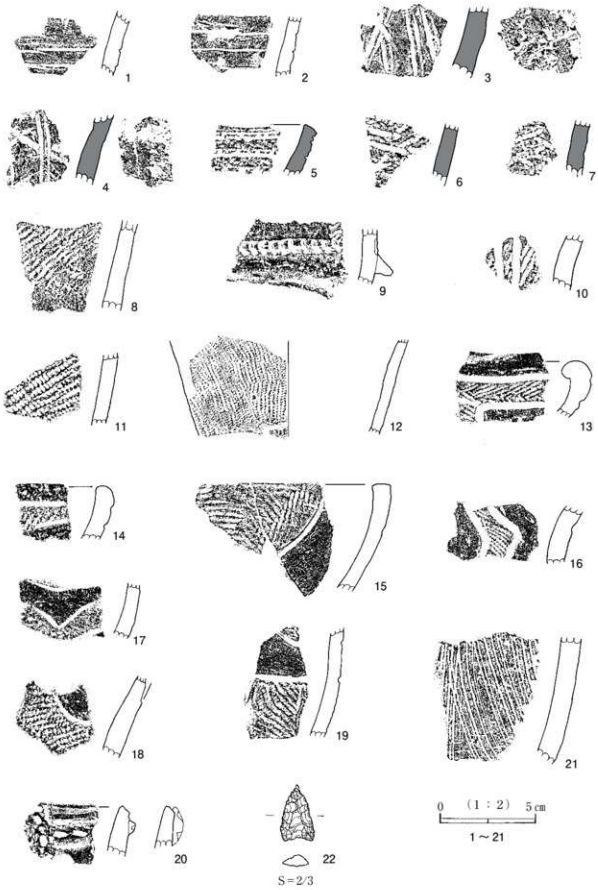
10～**12** は加曽利Ｅ式土器。**10** は地文縄文に「前々段反撚」を施文し，２条の懸垂文を垂下した胴部片で，ＥⅠ式。**11・12** は地文縄文を施したもので，使用原体は **11** が２段ＲＬ，**12** は「直前段反撚」。

13～**19** は称名寺式土器。**13**～**15** は口縁片で，**13・14** は口縁部に無文帯を有するが，**15** は直下から磨消縄文を施す。今回は胴部片を含め，全てが縄文充填で，原体は **15・19**（同一個体）以外が２段ＬＲ。

20～**21** は堀之内式土器。**20** は口縁下に横位の隆帯を貼付し，キザミを施す。さらに縦位の「８の字状貼付文」を付す。**21** は条線系粗製土器で，斜位→縦位の順で条線を施す。２点とも堀之内１式。

2. 石器（第４図）

確認調査において，石鏃１点が出土した。**22** は凹基無茎式石鏃で，ほぼ完存品。表裏とも両側縁及びノッチ（抉り）部分から，比較的ていねいな押圧剥離による調整がなされている。長さ2.1cm，幅1.4cm，厚さ0.4cm，重量1.2g。石材（岩種）はチャートを用いている。



第４図　縄文時代出土遺物

第３節　弥生時代

竪穴住居跡が10軒検出されたが，１例を除いては重複関係を持たないものであった。遺構密度が高いので，本来は比較的大規模な集落が存在した可能性が極めて高い。

1. 竪穴住居跡（第５図～第22図）

01D（第５図～第７図）

位置　A1・A2・B1・B2グリッドにまたがる。**重複関係**　単独。**主軸方位**　N-48°-W。**平面形**　小判形を呈する。**規模**　8.20m × 6.27m，遺構確認面からの深さ0.84 m。**壁**　きっちりと掘り込まれており，ほぼ垂直に立ち上がる。**床**　ハードロームまで掘り込んで床とする。全体に踏みしまって硬いが，特に炉とP1の間，P2-P3間，P4周囲の３箇所に島状の硬化範囲が認められた。**周溝**　廻らせていない。**炉**　P1-P2間に設ける。基本的な構造は地床炉であるが，甕形土器の胴部片を埋め込んでおり，縄文時代の「土器囲炉」的な観がある。炉底は焼けている。**貯蔵穴**　南壁際に位置し，平面形が楕円形で，底面が比較的平坦なP6が該当するか。**ピット**　P1～P4が主柱穴である。P5は位置的に見て，出入口の施設に該当する。炉跡北側のP7は，埋められた上で硬化面が被覆しており，古期の内部施設に伴うものである蓋然性が高い。**覆土**　10層（12層）に分層できた。7～10層は廃屋後の上屋解体から，廃材の焼却処理後までのもの。4a層はある種の「火入れ」儀式後の投げ込み土。2a層は2b層上面での「突き固め」行為によるもので，平面的に本跡の中央部を中心として，不整形な硬化範囲が認められた。以上が人為的な堆積と考えられる。これに対して，1層・2b層～3層・4b層～6層は，自然堆積である。**遺物出土状態**　復元できたものや，大破片を含めて，図化したもののほとんどは4b層の下部～6層からの出土で，自然埋没の過程における遺物（廃品）の廃棄行為と考えられる。中には，第７図**9**のように，5層・6層・9層で接合するものがあり，三回にわたって廃棄されたことがわかる。**建て替え**　P7の事例のように，内部施設の作り替えはあったが，建て替えと明らかに認められるものはなかった。**備考**　調査区の設定上，一部未調査である。なお，本跡の廃絶から埋没に至るプロセスは，以下のように想定される。

①廃絶後の上屋などの解体（8･9･10層）→②廃材の焼却処理→③消火活動に伴う土砂の投棄（7層）→④自然埋没と廃品の廃棄行為（4b層～6層）→⑤ある種の「火入れ」儀式と，直後の土砂投棄（4a層）→⑥自然埋没（2b層～3層）→⑦くぼ地上面での「突き固め」行為（2a層）→⑧完全埋没へ（1層）

出土遺物（第７図）

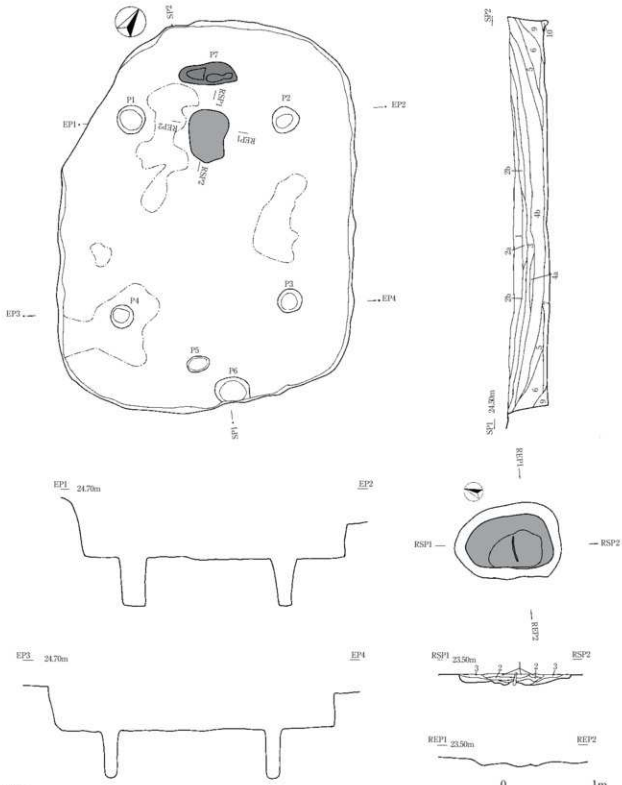
出土総数は207点（弥生土器203，縄文土器1，石3）で，うち94点をドット・マップ（遺物分布図）化して取り上げた。

1～6・10は南関東系。このうち，**1～6**は壺で，**10**は埦または無頸壺。**1**は複合口縁を呈し，頸部に広狭二段，肩部に一段の幅広な羽状縄文帯を施文し，無文部分には赤彩を施す。**2～4**は複合口縁を呈し，口縁下端にキザミを施した破片。**5**は大形壺の胴中位の破片で，赤彩を施す。**10**は複合口縁を呈し，体部外面及び内面全体に赤彩を施しており，口縁下端に穿孔の痕跡が認められる。

7～9は複合口縁を呈し，頸部無文帯を有する甕。**7**は口唇をひだ状にし，頸部無文帯の上下端を結節縄文で画す。口縁部と胴部に附加条縄文。**8**は口縁下端にキザミを施し，頸部と胴部の境を結節縄文で画す。底部に焼成後穿孔が認められる。**9**は有段甕で，段の部分に横位の結節縄文を重畳施文する。

11は甕または壺の口辺部。口唇上にキザミを施し，口縁下に一列の円形刺突を廻らし，頸部には２列１組の円形刺突を垂下する。**12**は刺突文を充填した，壺の頸部片。**13**は１本書きによる沈線を，２条沿わせて垂下する。**14～16**は同一個体。区画内に格子目文を充填した，壺形土器の頸部である。

17は凹基無茎式石鏃で，ほぼ完存品。表裏とも比較的ていねいな押圧剥離による調整がなされてい



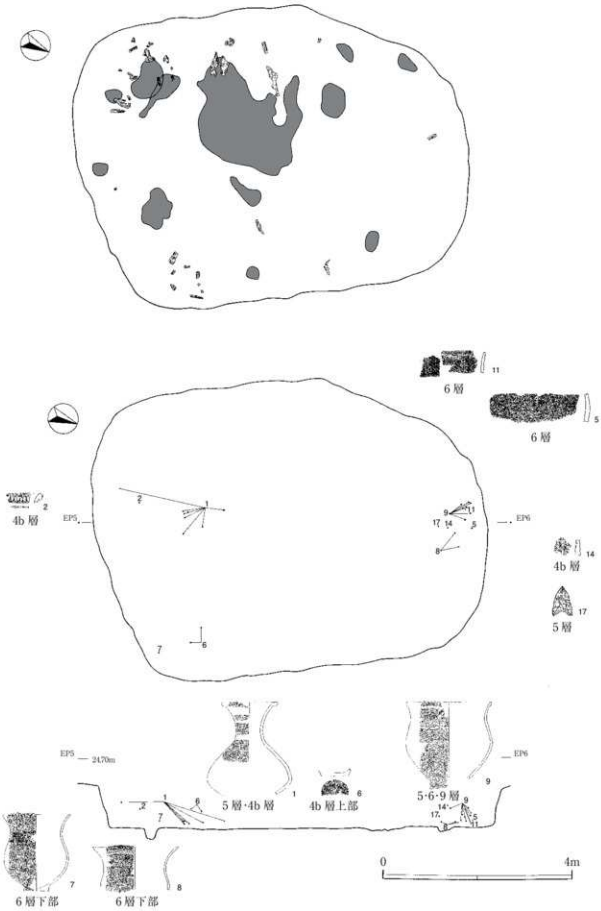
01D 土層説明

1　暗褐色土　暗褐色土を主体。少量の黒色土がにじむように混じる。粘性・しまり非常に弱い。
2a 暗褐色土　2b層と同じであるが、よく踏み締められ硬化面となっている。
2b 暗褐色土　暗褐色土を主体。多量の黒色土がにじむように混じる。
3　暗褐色土　暗褐色土を主体。少量の黒色土がにじむように混じる。褐色土が斑状に混じる。
4a 黒赤褐色土　4b層と同じであるが、火を受けて焼土化し、焼土が無秩序に混じった層。
4b 黒褐色土　黒色土を主体。ごく少量の暗褐色土がにじむように混じる。ごく少量のローム・焼土を含む。
5　暗黄褐色土　暗褐色土を主体。多量の暗褐色土とローム層がにじむように混じる。
6　黄褐色土　ローム主体。少量の暗褐色土がにじむように混じる。ごく少量のローム・焼土を含む。ごく少量の黒色土が無秩序に混じる。4cm程度のロームブロック少量。
7　暗黄褐色土　暗褐色土とロームが無秩序に混じる。少量の黒色土も混じる。多量の炭化物を含む。
8　暗黄褐色土　暗褐色土を主体。多量のロームが均一に混じる緻密な層。少量の炭化物を含む。住居西側のみ。粘性・しまり非常に強い。
9　暗黄褐色土　ローム主体。多量の暗褐色土がにじむように混じる。
10　暗黄褐色土　ローム主体。少量の暗褐色土がにじむように混じる。
※全体的に粘性・しまり弱い。3はしまり強い。

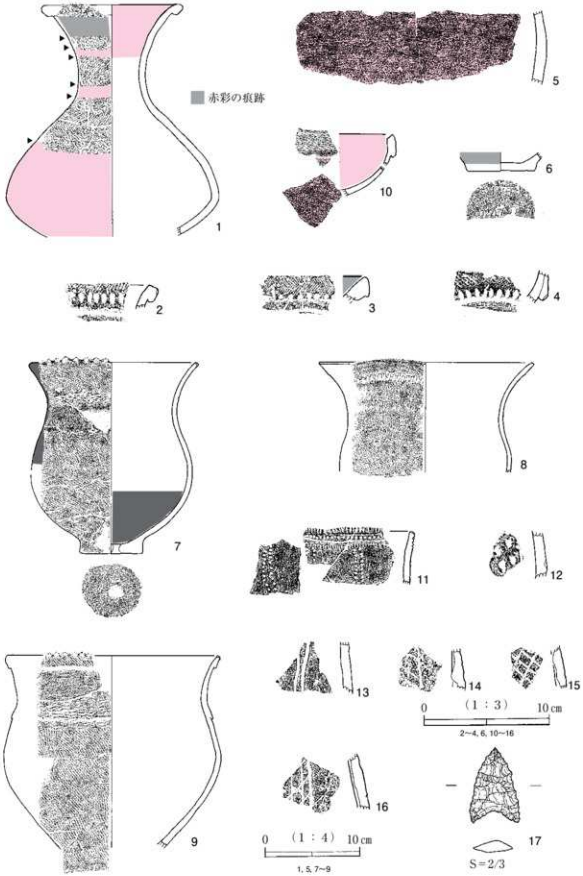
01D 炉土層説明

1　黄褐色土　よごれたロームと暗褐色土が混じる。
2　黒褐色土　黒色土に赤化したロームが多量に混じる。
3　赤褐色土　黒色土に赤化したロームブロックが無秩序に混じる。
※全体的に粘性・しまり弱い。

第5図　01D実測図



第６図　01D 炭化物・焼土・遺物分布図


赤彩の痕跡
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
0 (1：3) 10cm
2~4, 6, 10~16
0 (1：4) 10cm
1, 5, 7~9
S=2/3

第７図　01D 出土遺物

る。長さ3.0cm，幅2.6cm，厚さ0.4cm，重量1.9g。石材（岩種）は流紋岩を用いている。

02D（第8図～第9図）

位置　C3・C4・D3・D4・E3・E4グリッドにまたがる。**重複関係**　単独。**主軸方位**　N-44°-W。**平面形**　小判形を呈する。**規模**　9.45m×(6.36)m，遺構確認面からの深さ0.94m。**壁**　ほぼ垂直に立ち上がる。**床**　ハードロームまで掘りこんで床とする。全体的に踏みしまって硬いが，特に西壁際からP1-P2間と，P4-炉跡間に島状の硬化範囲が認められる。**周溝**　廻らせていない。**炉**　P1-P4間に設ける。地床炉で，皿状に掘り込まれ，炉底を含めて全体的に良く焼けている。**貯蔵穴**　検出されなかった。**ピット**　P1・P2・P4が位置的・規模的に見て主柱穴である。3本ともに建て替えの形跡は認められなかった。**覆土**　9層に分層できた。7～9層は廃屋後の上屋解体から，廃材の焼却処理（比較的小規模であるが）後までのもの。これに対して，1～6層は自然堆積である。**遺物出土状態**　住居中央部分の，覆土中層（4層中）より第9図1がまとまって出土した。これは後世の古墳時代前期の土師器「ひさご形土器」で，埋没途上のくぼ地となった部分に廃棄したものと思われる。小破片も含めて10数片が，比較的近接して捨てられていたものである。**建て替え**　認められなかった。**備考**　調査区の設定上，一部未調査である。なお，本跡の廃絶から埋没に至るプロセスは，以下のように想定される。

①廃絶後の上屋などの解体→②廃材の焼却処理→③消火活動に伴う土砂の投棄（7層～9層）→④自然埋没（5層・6層）→⑤廃品の廃棄行為（4層堆積中）⑥自然埋没（2層・3層）→⑦完全埋没へ（1層）

出土遺物（第9図）

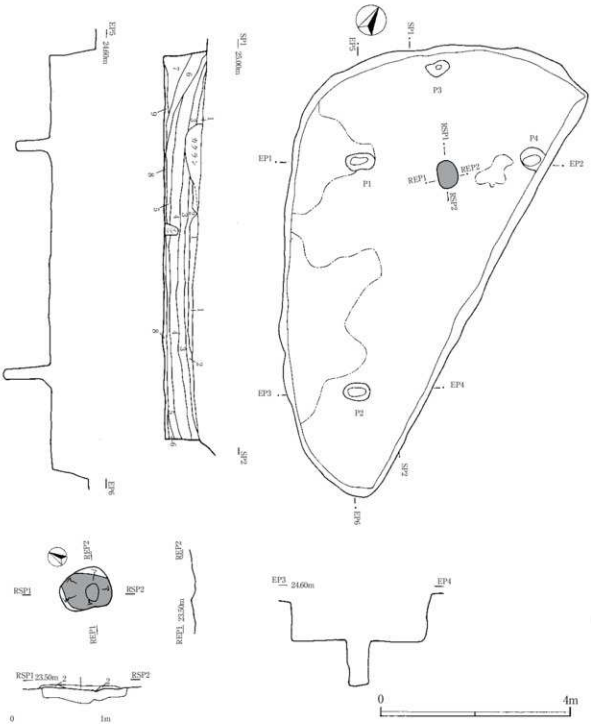
出土総数は38点（弥生土器35，縄文土器2，古墳前期土師器1）で，うち10点をドット・マップ（遺物分布図）化して取り上げた。

1のみ土師器となる蓋然性が高いもので，器形的にはひさご形土器（壺）に該当すると思われる。口縁部・胴部・底部が残存する（お互いは接合しない）。⑱口縁部はナデ。頚部～底部はヘラケズリ後，ヘラミガキ。㉓口縁部はナデ。他はヘラナデ調整を施す。

2・**3**は壺で，南関東系。**2**は網目状撚糸文を施し，**3**は外面に赤彩を施す。**4**～**8**は甕。**5**～**7**は単節縄文2段RL（前々段多条）を施す。**8**は附加条縄文を施文するものである。

03D（第10図～第11図）

位置　E2・E3・F2・F3グリッドにまたがる。**重複関係**　単独。**主軸方位**　N-49°-W。**平面形**　隅丸長方形（方形気味）を呈する。**規模**　3.85m×3.46m，遺構確認面からの深さ0.72 m。**壁**　ほぼ垂直に立ち上がる。ただし，ソフトロームを掘り込んでいる部分では，ややゆるやかに立ち上がる。**床**　ハードロームまで掘り込んで床とする。全体的に踏みしまっているが，東壁中央部の壁際に，一部硬度が落ちるエリアが存在する。**周溝**　南東コーナーから逆時計回りで，西壁の中央付近にかけて廻らせている東壁下では，「周溝内柱穴」が4本検出された。**炉**　北壁中央部，P4に隣接して設ける。地床炉で，炉底は焼けている。覆土中に多量の焼土粒子を含んでいる。**貯蔵穴**　P4が該当するか。**ピット**　6本検出したが，主柱穴と思われるものはなかった。P1・P2は出入口に伴うピットである。西壁付近に，ほぼ同規模かつ同覆土のP5～P8の4本が検出されたが，用途・機能は不明。**覆土**　8層に分層できた。5～8層は廃屋後の上屋解体から，廃材の焼却処理後までのもの。これに対して，1～4層は自然堆積である。ちなみに，8層は壁（掘り方）の崩落土で壁の解体時によるもの。**遺物出土状態**　平面的には北壁際，中央と南壁寄りの三箇所に，まとまった遺物の廃棄が見られた。一度ないし二度の廃棄行為があったものと推測される。一度目は廃材の焼却処理後，消火活動に伴う土砂の投棄の終了直後である。それは5層上面から出土したことにより推測した。二度目は3層中の遺物であるが，これは自然営力に



02D 土層説明

1　暗褐色土　暗褐色土を主体。ごく少量の黒色土が混じる。粘性・しまり弱い。
2　黒褐色土　黒色土を主体。少量の暗褐色土が混じる。
3　暗褐色土　暗褐色土を主体。多量の褐色土が斑状に混じる。粘性弱い。
4　黒褐色土　黒色土を主体。ごく少量の暗褐色土とロームが混じる。
5　暗褐色土　暗褐色土を主体。多量の黒色土が混じる。少量のロームがにじむように混じる。
6　暗褐色土　暗褐色土を主体。多量のロームが混じる。少量の黒色土，焼土もにじむように混じる。
7　暗黄褐色土　ロームを主体。少量の暗褐色土，焼土が混じる。
8　暗黄褐色土　ロームと暗褐色土が無秩序に混じる。少量の焼土，炭がにじむように混じる。
9　暗褐色土　暗褐色土主体。少量のローム，黒色土がにじむように混じる。5cm程度のロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱い。

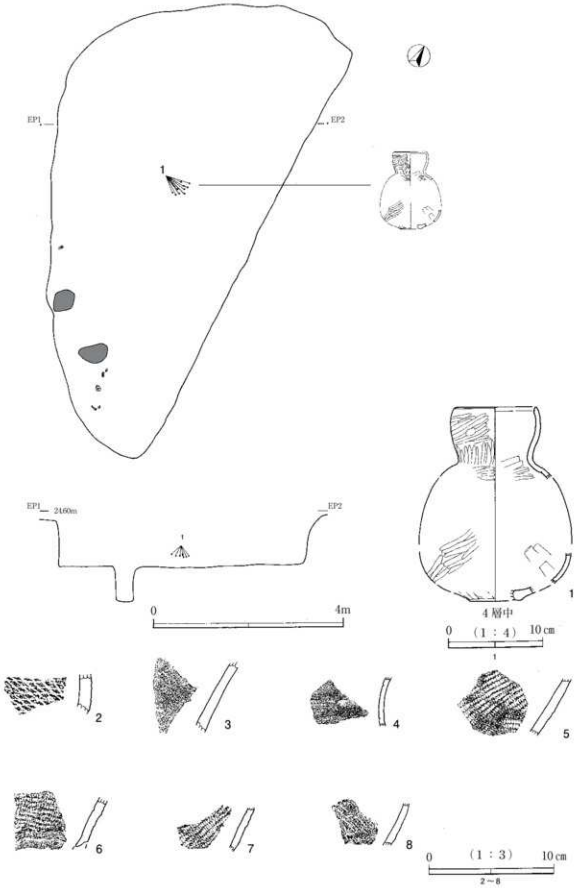
※全体的に粘性・しまり普通。

02D 炉土層説明

1　暗褐色土　暗褐色土に全体に焼土がにじむように混じる。目の粗い焼土粒子を多量に含む。
2　暗黄褐色土　暗褐色土，ロームが無秩序に混じる。少量の焼土を含む。

※全体的に粘性・しまり弱い。

第８図　02D 実測図



第９図　02D 出土遺物

よるものの可能性がある。これに対して5層上面のものは，点数的にまとまっているだけでなく，出土レベルが比較的一定であって，いわゆる「層面」の状態を示していた。これが，この事象に対して自然埋没の始まる「4層下部」ではなく，「5層上面」として認識した所以である。**建て替え**　認められなかった。**備考**　なお，本跡の廃絶から埋没に至るプロセスは，以下のように想定される。

①廃絶後の上屋などの解体（7層・8層）→②廃材の焼却処理→③消火活動に伴う土砂の投棄（5層・6層）→④廃品の廃棄→（5層上面）⑤自然埋没（4層）→⑥廃品の廃棄・流入（3層）→⑦完全埋没へ（1層・2層）

出土遺物（第11図）

出土総数は288点（弥生土器283，縄文土器2，石3）で，うち107点をドット・マップ（遺物分布図）化して取り上げた。

1～8・23は南関東系。1～4・23は壺。1は折り返し状の複合口縁を呈し，口縁部に縄文を施文する。頚部外面及び内面の器面調整は，ヘラケズリ後ヘラミガキで，赤彩を施す。2は外面に赤彩を施した頚部片。3は胴上部片で，肩部は縄文を施文し，胴部外面に赤彩を施す。4は頚部～肩部片で，肩部には縄文，頚部外面に赤彩を施す。23は胴下半～底部である。

5～8は高坏形土器または浅鉢。5は複合口縁で，内湾気味に立ち上がり，口唇上に縄文，口縁部は羽状縄文を重畳施文し，口縁下端にキザミを施す。体部外面及び内面に赤彩。6は5と近似した属性を持つが，別個体と思われる。7は口縁端部にキザミを施し，口縁部には横位の結節縄文を重畳施文する。8は区画内に網目状撚糸文を施文するものである。

17は頚部に輪積み痕をそのまま残し，胴部はヘラケズリ後ヘラナデの調整痕のみ，という甕。属性的には南関東系の甕に近似するが，胎土は後述する胴部に附加条縄文を地文とする一群に近い。

18は小形の甕または広口壺で，頚部～胴下半が残存する。頚部と胴部の境に段を有する，いわゆる有段甕で，段の部分に横位のキザミを廻らせる。胴部は附加条縄文（附加一条か）を地文として施す。

28は蓋形土器と思われる。器面調整は，内外面ともヘラケズリ後ヘラミガキを施す。これは，胎土が1～8・23とは全く異なっている。

9～11は口唇をひだ状にした，甕の口縁片。このうち9・11は複合口縁で，9は縄文を施文する。

12～15は頚部～胴上部片。12は頚部無文帯の下に横位の結節縄文を施す。13はいわゆる有段甕で，15は頚部と胴部の境に原体側面圧痕を廻らせるものである。

19・20は頚部片。19は01Dの14～16と同一個体。区画内に格子目文を充填した壺の頚部で，東関東系。20は横位に結節縄文を重畳施文するものである。

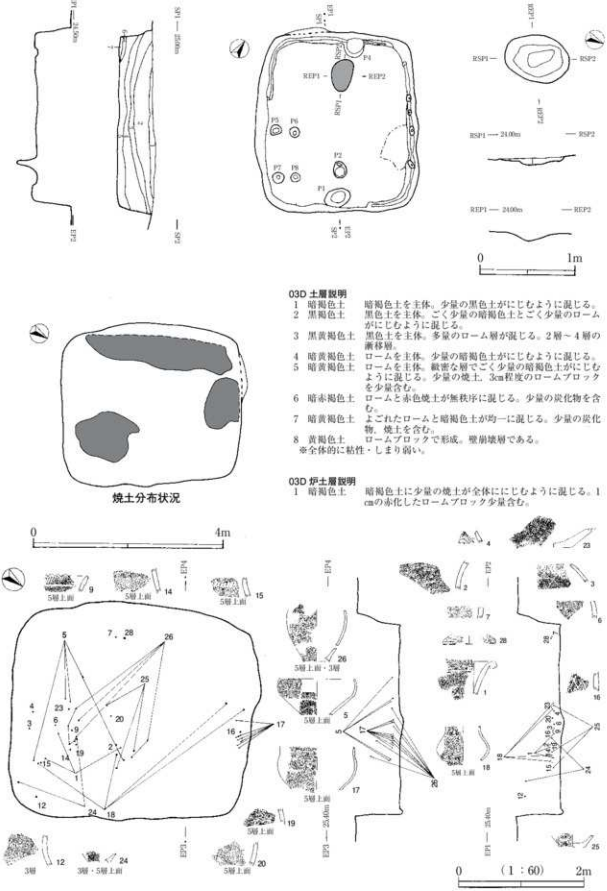
16・21・22は甕の胴部片。いずれも附加条縄文を地文として施文する。

26は甕の胴上部～底部付近で，文様及び装飾の類は一切施されず，器面調整（ヘラケズリ後ヘラナデ）のみである。28と本例は調査の時点では，「土師器」と認定して取り上げられていた。しかしながら，本遺跡では土師器の出土自体が極めて稀で，かつ該当する器種がないため，弥生土器として扱った。

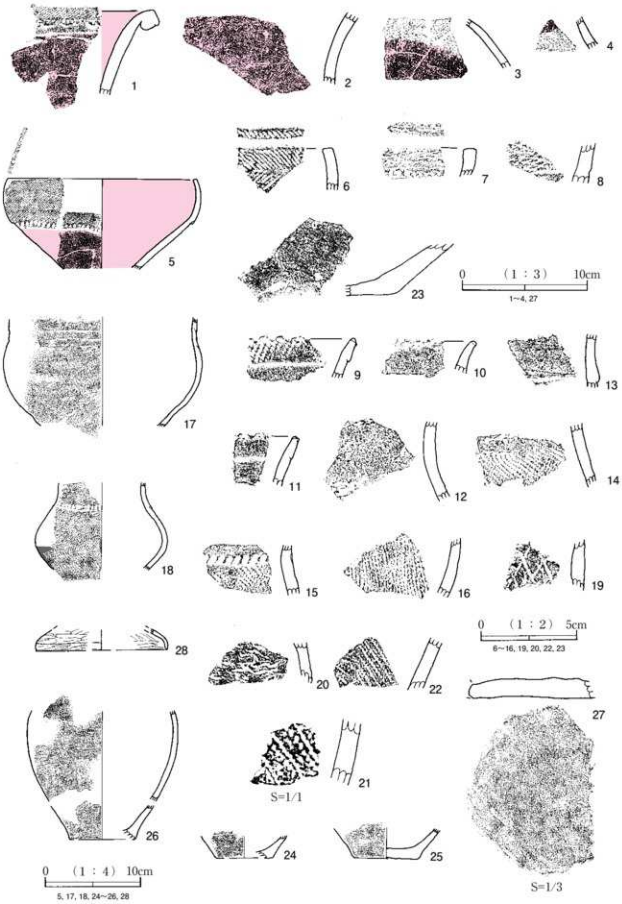
24・25・27は底部を集めた。27は大形壺の底部で，胎土に雲母・石英粒を含んだ東関東系。

04AD（第12図）

位置　G3グリッドで検出。**重複関係**　04BDを切る。**主軸方位**　N-47°-W。**平面形**　不整方形を呈する。**規模**　3.72m×（2.52m），遺構確認面からの深さ0.46m。**壁**　比較的ゆるやかに立ち上がる。**床**　ハードロームまで掘り込んで床とする。中央部及び北壁側に硬化面が見られる。**周溝**　廻らせていない。**炉**　検出されなかった。**貯蔵穴**　検出されなかった。**ピット**　検出されなかった。**覆土**　暗褐色土と暗茶褐色土の2層に分層できた。本跡は自然埋没である。**出土遺物**　遺物は出土しなかった。**備考**


03D 土層説明
1　暗褐色土　暗褐色土を主体。少量の黒色土がにじむように混じる。
2　黒褐色土　黒色土を主体。ごく少量の暗褐色土とごく少量のロームがにじむように混じる。
3　黒黄褐色土　黒色土を主体。多量のローム層が混じる。2層～4層の漸移層。
4　暗黄褐色土　ロームを主体。少量の暗褐色土がにじむように混じる。
5　暗黄褐色土　ロームを主体。緻密な層でごく少量の暗褐色土がにじむように混じる。少量の焼土、3cm程度のロームブロックを少量含む。
6　暗赤褐色土　ロームと赤色焼土が無秩序に混じる。少量の炭化物を含む。
7　暗黄褐色土　よごれたロームと暗褐色土が均一に混じる。少量の炭化物、焼土を含む。
8　黄褐色土　ロームブロックで形成。壁崩壊層である。
※全体的に粘性・しまり弱い。
03D 炉土層説明
1　暗褐色土　暗褐色土に少量の焼土が全体ににじむように混じる。1cmの赤化したロームブロック少量含む。
焼土分布状況
0　4m
0　(1：60)　2m
5層上面
3層
3層・5層上面
EP1
EP2
EP3
EP4
REP1
REP2
RSP1
RSP2
WDP1
EDP1
NDP1
SDP1
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
24.00m
25.40m

第 10 図　03D 実測図



第11図　03D 出土遺物

本跡は竪穴状遺構になる可能性がある。

04BD（第 12 図～第 14 図）

位置　G2・G3・H2・H3 グリッドにまたがる。調査区東側で検出。**重複関係**　04AD に切られる。**主軸方位**　N-42°-W。**平面形**　極めて整った小判形を呈する。**規模**　8.20m × 5.95m，遺構確認面からの深さ 0.73 m。**壁**　きっちりと掘り込まれており，ほぼ垂直に立ち上がる。ただし，ソフトロームを掘り込んだ上部では，やや崩落が認められる。**床**　ハードロームまで掘り込んで床とする。全体に踏みしまって硬いが，特に P3・P5 ～ P7 で囲まれた一帯では硬化範囲が認められた。逆に，中央部一帯では硬度が落ちる。**周溝**　全周する。平均幅 15cm で，きっちりと掘られている。**炉**　P1-P4 間に設ける。地床炉で，皿状に掘りくぼめられている。炉底は良く焼けている。**貯蔵穴**　平面形が隅丸長方形を呈し，底面が比較的平坦な P7 が該当するか。**ピット**　P1 ～ P4 が主柱穴である。このうち，P1・P2 は平面形が隅丸長方形に近い掘り方となっている。4 本とも建て替えの形跡は認められなかった。主軸上で南壁に近い位置の P5 は，出入口に伴うものと考えられる。P8・P9 は位置的・規模的に見て，上屋構造と関連する補助的な柱穴の可能性がある。この他には，P8 ～ P23 とした 16 本の小ピットがある。これらは径 0.3m ～ 0.4m で，壁（掘り方）の周囲を廻るように掘られている。**覆土**　9 層に分層できた。6 ～ 8 層は廃屋後の上屋解体から，廃材の焼却処理後までのもの。これに対して，1 ～ 5 層は自然堆積である。9 層は壁（掘り方）の崩落土。**遺物出土状態**　平面的には北壁際に 1 個体，目立つのが南壁際で，まとまった遺物の廃棄が見られた。前者は床面直上と 7 層中の破片が接合した。後者のうち，ある程度器形が復元できたものでは，**2** が床面直上と床面 +5cm（8 層）・7 層・2 層の破片が接合，**22** は砥石であるが，床面 +5cm（8 層）と 7 層の破片が接合している。これらから，遺物の廃棄行為は三回程度行われたことがわかる。また，2 層及び 3 層からも若干の遺物の出土が認められるが，「廃棄行為」によるものか，「流入」であるかは明らかにできなかった。そのため，先述した遺物の廃棄行為の回数には含めていない。**備考**　本跡の廃絶から埋没に至るプロセスは，以下のように想定される。

①廃絶後の上屋の解体と廃品の廃棄行為→②廃材の焼却処理→③消火活動に伴う土砂の投棄・廃品の廃棄行為（8 層）→④壁土・周堤の解体と廃品の廃棄行為（6 層・7 層）→⑤自然埋没（2 層～ 5 層）→⑥完全埋没へ（1 層）

出土遺物（第 14 図）

出土総数は 76 点（弥生土器 71，縄文土器 11，石 4）で，うち 40 点をドット・マップ（遺物分布図）化して取り上げた。

1・2・6 ～ **14** は南関東系。**1・6** ～ **12** は壺。**1** は大形壺の頸部。結節縄文で上端を区画し，羽状縄文を充填する。無文部には赤彩を施す。器内外面，特に内面が荒れている。**6** は口縁端部を欠いた口縁片。複合口縁で，縄文を施文し，下端にキザミを施すもので，内面は赤彩。**7** ～ **9** は肩部片で，いずれも予め文様部分に羽状縄文を施文しておき，沈線で山形文を描いてから，次いで画線外を磨消し，磨消縄文による文様帯を描出するものである。**10** ～ **12** は胴中位～胴下半の破片で，ともに別個体。いずれも器面調整は，ヘラケズリ後ヘラミガキで，しかる後に赤彩を施している。

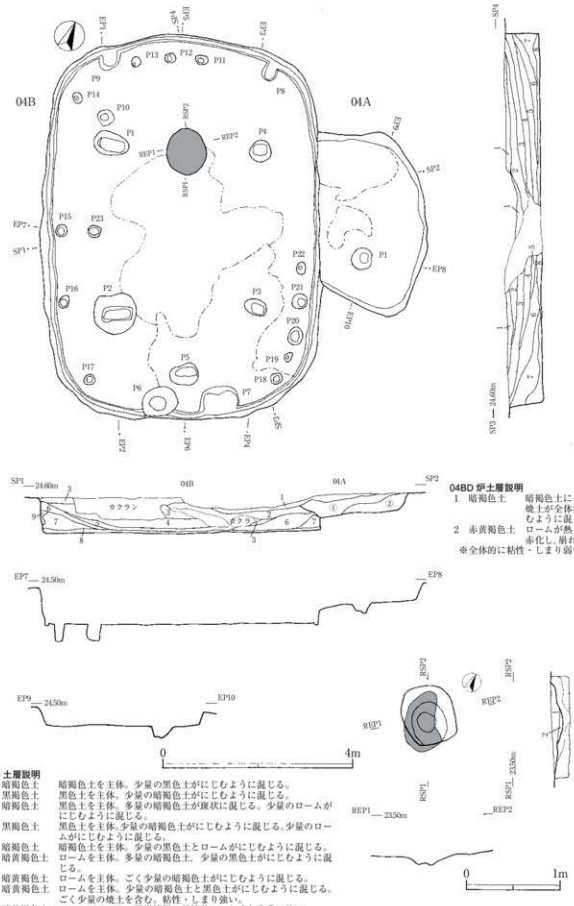
13 は高坏の口縁片か。口唇上に網目状撚糸文を施文し，器内外面に赤彩を施す。

14 は壺の頸部～肩部片であるが，胎土は在地のものに近く，肩部の文様帯の縄文は原体に附加条縄文を用いており，沈線や結節縄文などによる区画が見られない。無文部にはヘラミガキ後，赤彩を施す。

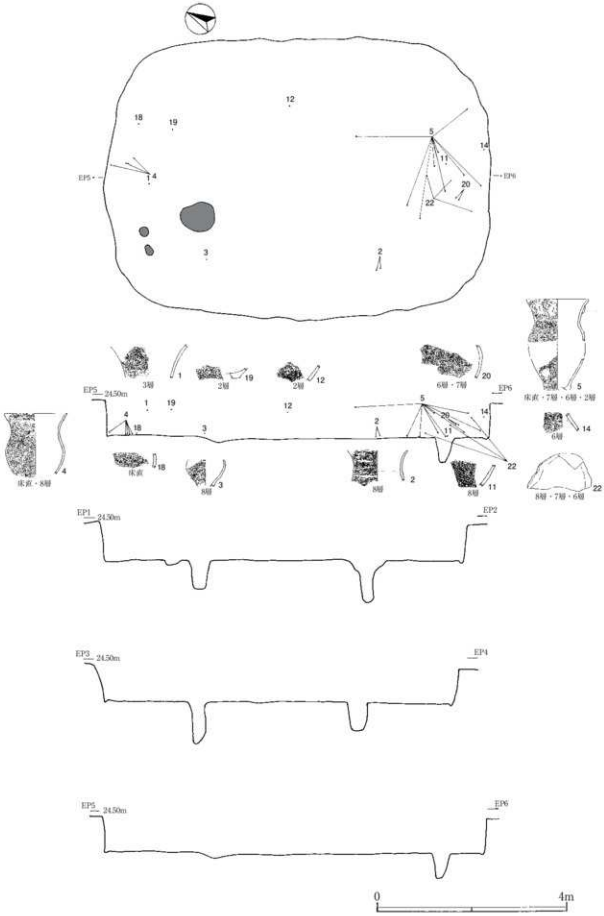
2 は甕。口辺～頸部は輪積み痕を残すが，ヘラナデにより多少なで消している。

3 は小形の埦形土器。口縁部に三段ほど輪積み痕を残し，体部外面はヘラケズリ後ヘラナデ調整のみ。

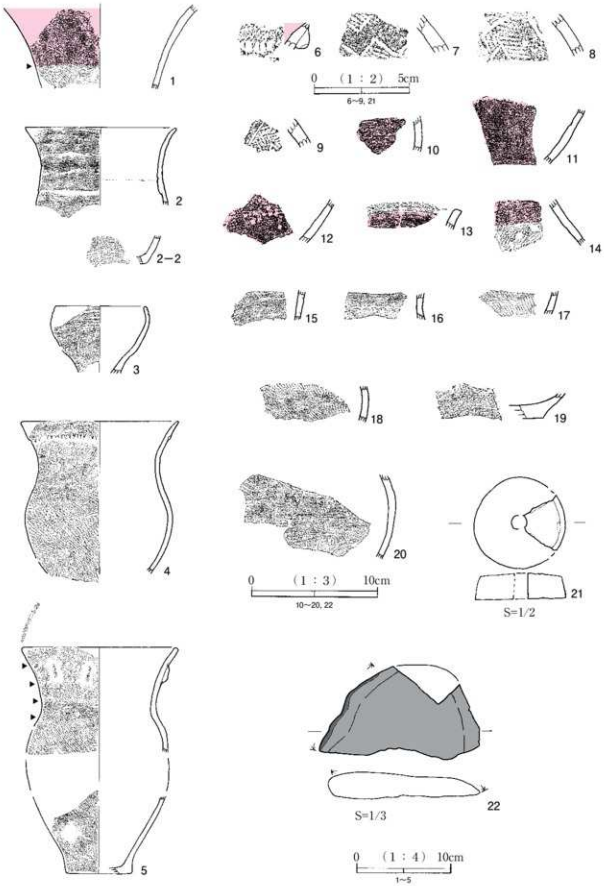
4 は甕。複合口縁で，口縁下端にキザミを施す。頸部無文帯を挟み，胴部は附加条縄文を施文する。


04B
04A
SP1
SP2
SP3
SP4
EP1
EP2
EP3
EP4
EP5
EP6
EP7
EP8
EP9
EP10
REP1
REP2
RSP1
RSP2
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
24.60m
24.50m
カクラン
0
4m
1m
04D 土層説明
1　暗褐色土　暗褐色土を主体。少量の黒色土がにじむように混じる。
2　黒褐色土　黒色土を主体。少量の暗褐色土がにじむように混じる。
3　暗褐色土　黒色土を主体。多量の暗褐色土が斑状に混じる。少量のロームがにじむように混じる。
4　黒褐色土　黒色土を主体。少量の暗褐色土がにじむように混じる。少量のロームがにじむように混じる。
5　暗褐色土　暗褐色土を主体。少量の黒色土とロームがにじむように混じる。
6　暗黄褐色土　ロームを主体。多量の暗褐色土、少量の黒色土がにじむように混じる。
7　暗黄褐色土　ロームを主体。ごく少量の暗褐色土がにじむように混じる。
8　暗黄褐色土　ロームを主体。少量の暗褐色土と黒色土がにじむように混じる。ごく少量の焼土を含む。粘性・しまり強い。
9　暗黄褐色土　ロームブロック、壁崩壊層。粘性強い、しまり非常に強い。
①　暗褐色土　暗褐色土を主体。ごく少量の黒色土とごく少量のロームがにじむように混じる。
②　暗黄褐色土　ロームを主体。ごく少量の暗褐色土がにじむように混じる。
※全体的に粘性弱い、しまり普通。
04BD 炉土層説明
1　暗褐色土　暗褐色土に少量の焼土が全体ににじむように混じる。
2　赤黄褐色土　ロームが熱を受け赤化し、崩れた層。
※全体的に粘性・しまり弱い。

第 12 図　04D 実測図



第 13 図　04BD 遺物分布図



第 14 図　04D 出土遺物

5は東関東系。頸部無文帯を挟んで，口辺と胴部に地文として附加条縄文を施文する。この後，口縁下に横位二列の円形竹管による刺突列を施し，それをまたぐ形で縦長の貼瘤（瘤状の突起）を廻らせる。

21は土製紡錘車で，表裏面とも無文，かつ無装飾である。**22**は砂岩製の置砥石。

05D（第15図～第16図）

位置　J2・J3グリッドにまたがる。**重複関係**　単独。**主軸方位**　N-56°-W。**平面形**　隅丸方形（長方形気味）を呈する。**規模**　4.26 m × 3.87m，遺構確認面からの深さ0.42m。**壁**　ほぼ垂直に立ち上がる。**床**　ハードロームまで掘り込んで床とする。炉の周辺とP2を結んだ内側に，硬化範囲が認められる。床が露呈した状態で廃材などの焼却行為を行ったため，焼土が床面に密着しているだけでなく，西壁側では床自体が焼けている箇所が見られる。**周溝**　廻らせていない。**炉**　ほぼ中軸上，やや北壁寄りに設ける。地床炉で，炉底は極めて良く焼けている。**貯蔵穴**　検出されなかった。**ピット**　2本検出した。P1は主柱穴となる可能性もあるが，決定要素に乏しく，現状では認定できなかった。P2は位置的に見て，出入口に伴うものか。**覆土**　5層に分層できた。5層は廃屋直後に廃材の焼却処理を行い，その後消火活動のために投げ込まれた土砂である。1～4層は自然堆積。このうち，2～4層はロームブロックなどが目立ち，住居の周囲に築かれた「周堤」が，自然に崩壊して堆積したものと考えられる。

遺物出土状態　二度の廃棄行為が認められた。一回目は，廃屋直後から遅くとも廃材の焼却処理までに行われたものである。床面直上から5層下部出土の破片が接合した第16図**3**は，廃材の燃焼の熱で「焼けただれた状態」となっている。これらが廃棄されたものなのか，あるいは遺棄されたものなのかに関しては，明らかにできなかった。二回目は消火活動に伴う土砂投棄の際中で，土器類が廃棄されている。これらは，5層中部～上部出土のものであって，同図**11・12**のように焼けた状態のものと，同図**4・10**のようにあまり焼けていないものとがある。**建て替え**　認められなかった。**備考**　なお，本跡の廃絶から埋没に至るプロセスは，以下のように想定される。

①廃絶後の上屋の解体・廃品の廃棄（遺棄）→②廃材の焼却処理→③消火活動に伴う土砂の投棄（5層）→④廃品の廃棄行為（5層中部・上部）→⑤周堤の崩壊と自然埋没（2層～4層）→⑥完全埋没へ（1層）

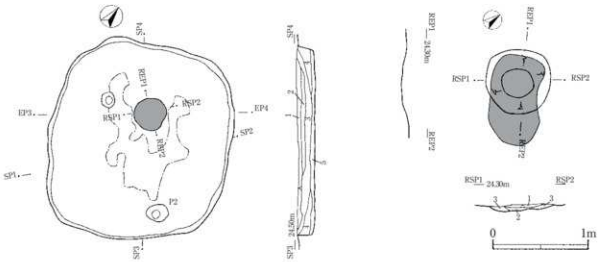
出土遺物（第16図）

出土総数は373点（弥生土器369，縄文土器3，石1）で，うち204点をドット・マップ（遺物分布図）化して取り上げた。

1～**9**・**11**・**12**・**17**は南関東系。**1**～**9**は壺。**3**は大形壺で，口辺～胴下半が辛うじて残存する。同一個体の破片群が覆土の5層下部～床面直上の双方から出土した。このうち，数量的にも多い床面直上出土の破片は，廃屋後の廃材の焼却処理行為による熱で，器面が「焼けただれた状態」となっている。これにより，接合作業は困難を極め，かつ器面調整痕や施文に至るまで，あらゆる属性が不明瞭なのは否めず，器形に関しては，部位別の破片から合成作図をするより他はなかった。口縁端部を欠くが，複合口縁と思われる。頸部には羽状縄文を施文し，上端を結節縄文で画す。無文部はヘラミガキ後，赤彩を施している。肩部には上下端は不明であるが，やや幅広に羽状縄文を重畳施文した文様帯があり，胴中位付近にかけては，磨消縄文による山形文を横位に廻らし，文様帯を形成していた。

1・**2**は口縁片で，ともに複合口縁。**1**は幅広の口縁部に羽状縄文を施文し，縦位の棒状浮文を貼付（痕跡を含め3本確認）してキザミを施し，口縁下端にもキザミを施している。頸部には赤彩を施す。**2**は口唇部を欠く。幅狭の口縁部に羽状縄文を施文し，口縁下端にキザミを施している。頸部に赤彩を施す。

4は胴中位片で，器内外面が荒れている。**5**は胴上部片で，磨消縄文による山形文を施す。無文部に赤彩の痕跡が認められる。**6**～**8**は胴下半の破片で，ヘラミガキ後に赤彩を施す。**9**は胴下半～底部片。

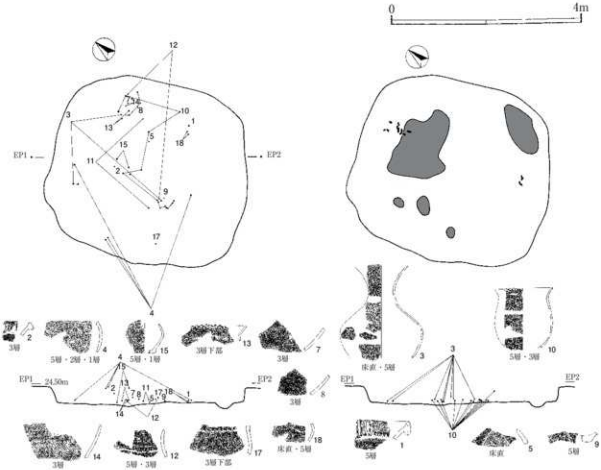


05D 土層説明

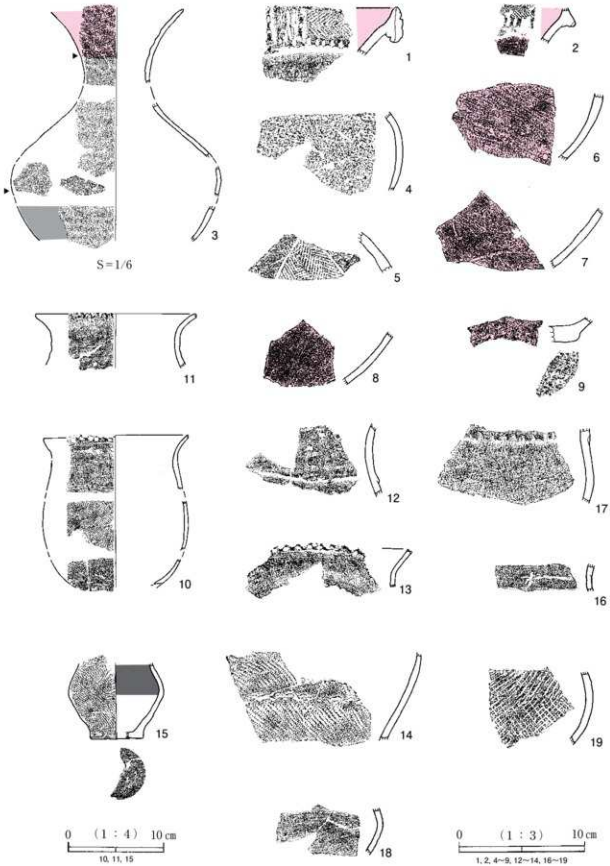
1　暗褐色土　　暗褐色土を主体。少量の黒色土とロームがにじむように混じる。
2　暗黄褐色土　暗褐色土を主体。多量のロームがにじむように混じる。
3　暗黄褐色土　ロームを主体。少量の暗褐色土がにじむように混じる。
4　暗黄褐色土　暗褐色土を主体。少量のロームがにじむように混じる。
5　暗褐色土　　暗褐色土を主体。少量のローム・焼土が無秩序に混じる。
※全体的に粘性弱い，しまり普通。

05D 炉土層説明

1　暗赤褐色土　暗褐色土に少量の焼土が全体ににじむように混じる。
2　赤褐色土　　焼土を主体。少量の暗褐色土がにじむように混じる。
3　赤黄褐色土　ロームと焼土と暗褐色土が無秩序に混じる。
※全体的に粘性弱い，しまり強い。



第15図　05D 実測図



第 16 図　05D 出土遺物

11・12 は甕。**11** は口唇にキザミを施し，ひだ状にする。**12** は有段甕となる。同一個体になる可能性がある。**17** は有段甕の胴部片で，段上に人間の「爪」を用いたキザミを廻らす。

10 は口唇がひだ状で，頚部無文帯を形成し，胴部は附加条縄文を施文する。**15** は小形甕または壺。**16** は輪積み痕を残した頚部片。**19** は東関東系。甕の胴中位片。附加条縄文を横位に羽状施文する。

06D（第17図～第18図）

位置　J1・J2・K1・K2グリッドにまたがる。**重複関係**　単独。**主軸方位**　N-47°-W。**平面形**　やや不整な隅丸長方形を呈する。**規模**　4.25m × 3.72m，遺構確認面からの深さは0.70m。**壁**　ほぼ垂直に立ち上がる。**床**　北側の一部を除き，他は貼床。掘り方調査で判明したのであるが，住居構築前に，前代の木の根痕ないし風倒木痕が存在していたようである。そのために，所定の深度まで掘り込んでもハードロームに達せず，やむなく貼床を施工することになったものと推察される。床面自体は，北壁中央から西壁中央と，炉の東脇に硬化部分が認められる。**周溝**　廻らせていない。**炉**　北壁中央寄りに設ける。地床炉で，炉底は焼けている。**貯蔵穴**　検出されなかった。**ピット**　3本検出されたが，いずれも主柱穴ではなかった。P1 ～ P3は，北壁際に1本，西壁際に2本検出されたものであるが，用途・機能に関しては不明である。**覆土**　8層に分層できた。5層・6層は，住居の廃絶に際して「周堤」などを崩して投げ込んだ土砂。1 ～ 4層は自然堆積である。そして，7層は壁（掘り方）の崩落土で，8層は貼床下の掘り方覆土（前代の木の根痕）。**遺物出土状態**　少なくとも，三つの事象を認定することが可能である。まず「遺棄」としてははほぼ床面直上で出土した小形甕（**3**）と装飾壺転用支脚（**1・2**）がある。それから，5層上部出土の土器群は「廃棄」されたもので，平面分布的には西壁側と南西コーナー付近のものが該当する。最後に2層・3層出土の土器群は，「廃棄」ないし「流入」したもので，第17図**5**は6層中と3層中のものが接合した。また，同図**4**は5層上部と3層中の各々に破片が廃棄されており，接合はしないものの，同一個体であることが確認できた。**建て替え**　認められなかった。**備考**

本跡の廃絶から埋没に至るプロセスは，以下のように想定される。

①廃絶後の土屋の解体→②土器類の遺棄→③「周堤」などの解体に伴う土砂の投棄（5層・6層）→④廃品の廃棄行為（5層上部）→⑤自然埋没（4層）→⑥廃品類の廃棄ないし，周辺の廃品の流入（2層・3層）→⑦完全埋没へ（1層）

出土遺物（第18図）

出土総数は96点（弥生土器85，縄文土器11）で，うち59点をドット・マップ（遺物分布図）化して取り上げた。

1・2・5 ～ **8・13** は南関東系。**1・2・6** ～ **8** は壺。**1** は口縁～肩部の残存。複合口縁で，口唇部に縄文，口縁部には羽状縄文を施文し，口縁下端にキザミを施す。頚部～肩部にかけて，羽状縄文を施文してから，上下端は結節縄文を横位に二段重畳施文して画した，文様帯を形成する。無文部及び口辺部内面は，ヘラミガキ後に赤彩を施す。そして，肩部以下を欠損後，欠損面を多少磨って整え，器台に転用する。

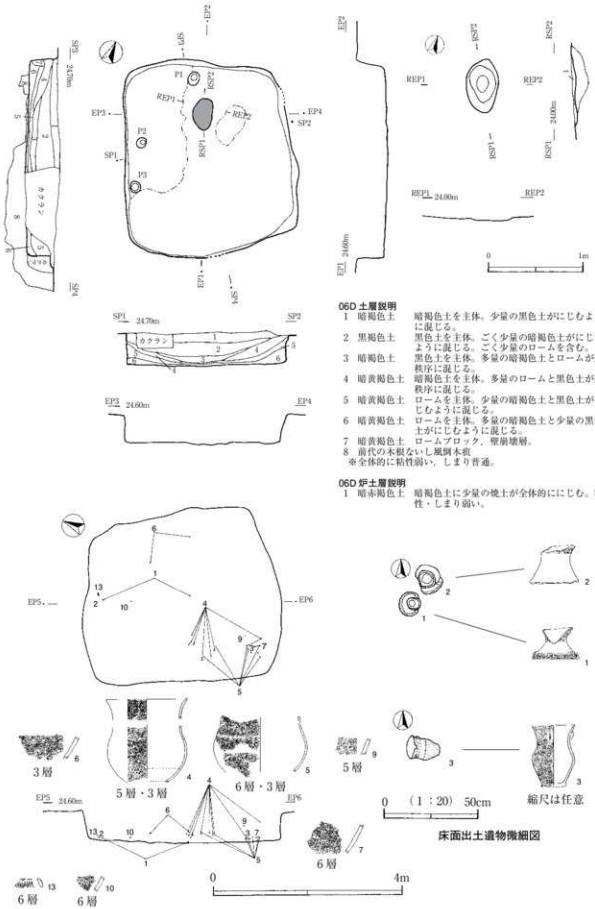
2 は口辺～肩部の残存。口縁を欠損するが，肩部に羽状縄文を施文してから，上端は結節縄文を横位に二段重畳施文して画した，文様帯を形成する。頚部～口辺部内面にかけて，ヘラミガキ後赤彩を施す。本例も**1**と同様に，口縁と肩部以下を欠損後，欠損面を多少磨って整えてから，器台に転用している。

6・7 は胴下半の破片で，ヘラミガキ後，赤彩を施す。**8** は胴上部片。磨消縄文で山形文を構成する。

5 は甕の頚部～胴下半。頚部と胴部の境に段を有する，有段甕である。文様・装飾の類は一切施されず，外面がヘラケズリ後ヘラナデ，内面はヘラケズリ後ヘラミガキという，器面調整のみ施している。

13 は高坏の裾部。裾端は折り返し（複合口縁と同様），縄文を施文後，上端にキザミを施す。

4 は甕の口縁～胴下半。口唇をひだ状にし，口縁内面に稜，頚部と胴部の境に段を有する。


SP1
SP2
SP3
SP4
EP1
EP2
EP3
EP4
EP5
EP6
P1
P2
P3
REP1
REP2
RSP1
RSP2
32.00m
24.70m
24.60m
24.00m
21.00m
カクラン
06D 土層説明
1 暗褐色土　暗褐色土を主体。少量の黒色土がにじむように混じる。
2 黒褐色土　黒色土を主体。ごく少量の暗褐色土がにじむように混じる。ごく少量のロームを含む。
3 暗褐色土　黒色土を主体。多量の暗褐色土とロームが無秩序に混じる。
4 暗黄褐色土　暗褐色土を主体。多量のロームと黒色土が無秩序に混じる。
5 暗黄褐色土　ロームを主体。少量の暗褐色土と黒色土がにじむように混じる。
6 暗黄褐色土　ロームを主体。多量の暗褐色土と少量の黒色土がにじむように混じる。
7 暗黄褐色土　ロームブロック，壁崩壊層。
8 前代の木根ないし風倒木痕
※全体的に粘性弱い，しまり普通。
06D 炉土層説明
1 暗赤褐色土　暗褐色土に少量の焼土が全体的ににじむ。粘性・しまり弱い。
3層
5層・3層
6層・3層
5層
6層
縮尺は任意
0　（1：20）　50cm
床面出土遺物微細図
0　4m

第 17 図　06D 実測図